

<オンライン教学講座「報恩抄」⑦ 参考資料>

◎本尊問答抄

問うて云わく、末代悪世の凡夫は何物をもって本尊と定むべきや。

答えて云わく、法華經の題目をもって本尊とすべし。

(御書新版 302 ページ・御書全集 365 ページ)

◎本尊問答抄

法華經は釈尊の父母、諸仏の眼目なり。釈迦・大日、総じて十方の諸仏は、法華經より出生し給えり。故に今、能生をもって本尊とするなり。

(御書新版 304 ページ・御書全集 366 ページ)

◎希望の經典「御書」に学ぶ 報恩抄

大聖人御自身が、道なき道を「声もをしまず」(全 328・新 261) 流布されてきたがゆえに、末法流布の大法たる三大秘法が確立されたのです。

民衆仏法の興隆は、戦いの中でこそ築き上げられていくことを断じて忘れてはいけません。

一人静かに唱えているだけでは、悪世末法の衆生には広がりません。

自他ともに無明を打ち破らない限り、一人一人の生命の変革は実現しません。

ゆえに、大聖人は、立宗宣言後、一日もたゆまず「声もをしまず」唱え続けられたのです。

そのために命にも及ぶ大難を受けられました。しかし、何も臆することなく、末法流布の使命の道を歩まれた。

まさに、「声もをしまず」とは、不惜身命の精神そのもののなのです。

(『希望の經典「御書」に学ぶ』第 3 卷 80 ページ)

◎勝利の經典「御書」に学ぶ 報恩抄

「日蓮が慈悲曠大ならば」(全 329・新 261) ——こう言われる大聖人の慈眼には、「日蓮と同意」(全 1360・新 1791) の広布の大誓願に燃えて、後継の地涌の菩薩として娑婆世界で妙法を実践し、民衆を救いきっていく人間群が、二陣三陣と躍り出ていく光景が、ありありと映じていたのではないのでしょうか。

まさしく今、日本中、世界中で、この「慈悲曠大」なる尊き「仏の仕事」を勇んで遂行しているのは誰か。「仏の使い」としての誉れと使命を胸に、忍耐強く、また誇り高く法を弘めているのは誰か。いったい誰が、勇敢に民衆の大海原に飛び込んで、苦悩に沈む一人を励ましてきたのか。一人また一人と、絶望の淵から希望の人生へと蘇生させてきたのか。それは、わが創価学会の同志であり、わが SGI の先駆者であります。

(『勝利の經典「御書」に学ぶ』第 22 卷 13 ページ)

◎新時代第 17 回本部幹部会（2008 年 4 月）でのスピーチ

さまざまな「恩」のなかでも、とりわけ大切な、根本の「恩」とは何か。

それは「師恩」、すなわち、仏法を教え、人生の規範を示す師匠の恩である。

師恩に報いるための要諦は何か。

不惜身命で広宣流布のために戦うことである。

大難が競い起ころうとも、身命を惜しまず、邪悪と戦い抜く。そして、正法を弘めて、人々を救っていく——これこそ、師恩に報いる真の道なのである。

その通り、一分の狂いもなく、創価の三代は、健気な真実の同志とともに、戦い続けてきた。

「師恩に報いる」という根本の道を示し切ってきた。

だからこそ、現代史の奇跡とうたわれる、世界広宣流布の時代が開かれたのである。